

子どもたちが語る「生活科」

～「脳みそだけでなく、自分自身の体全部、

心まで大きくしてくれたのが、生活科だったような気がします」～

「生活科」は、平成元年に改訂された学習指導要領において、小学校の低学年について、それまでの社会科及び理科を廃止して新設されました。

その目標は、具体的な活動や体験を通して、自分と身近な社会や自然とのかかわりに関心を持ち、自分自身や自分の生活について考えさせるとともに、その課程において生活上必要な習慣や技能を身に付けさせ、自立への基礎を養うものです。

次は、愛媛県の小学校のある先生が、「生活科」が全面実施される前に移行措置として導入された当時の子どもたち（現高校1年生）と語った時の様々なエピソードです。

【ぼくの大事なテントウムシ君】

A男は、ケヤキの幹で見つけたテントウムシの幼虫のことを語った。彼は、卵・幼虫・さなぎといろいろ見つけたが、可愛く動き回る幼虫に心引かれて飼うことにした。ある時は、脱走した「ぼくの虫」を泣きながら探し、ある時は、幼虫のからだが軟らかいのでつぶしてしまって落ち込んだ。泣きながら図鑑をめくっていると、絵の具筆を使うといいと書いてあったのでやってみると、これがグッド。さなぎのうちは、動かないので心配したが、羽化して成虫になった時は、本当の親のように喜んだ。最初は透明で、時間がたつにつれて星の模様が浮かんでくる。美しく、感動した。

翌年も、ケヤキに行ってみたが、全然見つからず、不思議に思っていたら、除草剤をまいた影響だったと分かった。校庭中探したら、ズッコケランドの草むらにいた。自分の子どもに害がないところに卵を産むテントウムシのお母さんは賢いんだと思ったそうだ。

それまで、虫に触ることもできなかったA男が、ここまでこだわってかかわったのは、幾度かの失敗を乗り越えて飼い続ける中で、「生命」を感動をもってとらえることができたからであろう。心を寄せてじっくりかかわる中で、知識や技能が自然に身に付き、生態や環境をとらえる目が育っている。

【おじいちゃん、わたしのキュウリを食べて】

B子は、キュウリを育てたことを語った。初めて知った野菜の花の美しさや、もぎたてのキュウリのとげの痛さ、丸かじりの美味しさ。この感動を徳島のおじいちゃんに伝えようと、小包で送ることを思い出した。郵便局で小包を送る方法や、何日で届くか、新鮮なうちに届くかどうかを調べ、とれたてのキュウリを送った。病気であまりものが食べられなくなっていたにもかかわらず、おじいさんは、「B子が作って送ってくれたこのキュウリは、美味しい」と言って食べてくださったとか。

それから間もなくおじいさんが亡くなられたことや、おじいさんとの最後の素晴らしい思い

出になったことなどを、B子の母親からの手紙で知ったことを私も思い出した。野菜の栽培活動と、郵便の働きを知る活動がつながって生まれた体験である。

「あの時、君に『お前のキュウリを食べたから、おじいさん、死んだんじゃないのか』なんて言われてね」と、笑っていたB子であったが、今でもおじいさんとの楽しい思い出を宝物にしていることがうかがえた。

また、野菜にこだわったB子は、お店で立派な大根が100円で売られているのを見て、思わず「安い!」と思ったそう。作るのと買うのでは大違い。一生懸命育てても、か細い大根しかできなかった経験から、野菜を目にすると生産者と消費者の両方の立場から考えるようになったそう。今現在も、ミニトマトを育てているとか。

学習がその場限りで終わっていない。単元の学習が終わっても、課題意識はオープンエンドに続いている。いろいろな経験がつながって、新たな活動が生まれている。B子は、ハートを核としているいろいろなものをうまくネットワークし、自分の学びのスタイルをつくりあげていったのだろう。

【町探検物語】

C子は、町探検のことを語った。普段何気なく前を通っている气象台や警察署なども、中に入ってみると知らないことばかりで、わくわくしたり説明が難しかったりしたこと。また、2回目の町体験で、子犬との出会いがあったこと。

石手寺からの帰り、どこかの子犬がずっとついてきた。初めは可愛いので楽しかったが、段々と心配になってきた。どこの犬だろう。このままついてきたら、きっと帰れなくなる。そこで思い付いたのが、餌をやってこの地域に止まらせること。パン屋さんに頼んで、パンの耳をもらって犬にあげた。これで安心と振り返ってみると、やっぱりついてくる。ここで、学校へ知らせなくてはと判断し、帰校が遅れるかもしれないコールを入れる。さすがに、リーダーである。みんなでいろいろ考えて相談しているところへ、近くの小学校の、この犬のことを知っている子どもが通りかかったので、事情を話して持ち主のところへ届けてもらうことにした。

この子犬を通していろいろな人と触れ合い、楽しい町探検にもうひと味加わる温かい体験をしたそう。私も、C子のすてきな「町探検物語」を思い出した。

この先生は、こうしたエピソードについて、次のように言っています。

『こうした10年も前のことを楽しそうに語ってくれた子どもたち。7,8歳で体験したことなのに、すべてにその子なりの素晴らしいストーリーがあり、それぞれの心の中に生き続けている。ちっとも色あせていない。改めて聞いても、感動させられる。それは、教師が作り上げたストーリーではなく、子ども自身が作り上げた、世界中でたったひとつのマイストーリーだったからであろう。』

(『総合教育技術』(小学館発行)1999年11月号より一部抜粋)